

Q4

教室を出て別の場所に居るようになった子への支援は？

まずは
ここから



- 通常の学級に居づらくなった子が、空き教室などに落ち着いた場合、そこを居場所と認めることも検討します。
- その上で、校内に支援チームを編成し、本人にとって目当てと見通しのもてる学校生活づくりを図ります。

ヒロシさん（小6）への、支援チームによる生活づくりの事例を紹介します。



教室に居づらいと感じたヒロシさんは、校内を巡り歩いた後、いつもは空いている教育相談室に居るようになりました。

はじめは探し歩いたホリ先生も、保健室のマエダ先生に話したヒロシさんの言葉を聞いて、考えてしまいました。

教室にいと友だちの声がうるさくてだめなんです。元気が出ないんです。この教育相談室にいたいんです。

ヒロシさんが元気を回復し、目当てをもった学校生活を送ってほしい。

コーディネーターが中心となって、学級担任、養護教諭、教頭、自律学級担任、専科担任の**6名で支援チーム**を編成する。

個別支援は、1日1時間ずつで交替する。

予定表の導入

- 毎朝学級担任が本人と相談して、1日の予定を作成

サイン帳形式の予定表に修正

- ご褒美としての担当職員のサイン

今日の予定 月 日 () ○ ○ ○ ○ (児童氏名)

時間	場所	内容	先生	教科学習の印	サイン
朝	教育相談室	朝の会	学級担任		
1校時	保健室	お話	養護教諭		
2校時	自律学級	算数	自律学級担任		
業間休み	教育相談室	ゲーム屋さん	コーディネーター		
3校時	自律学級	国語	自律学級担任		
4校時	職員室	お手伝い	教頭		

サインが集まると教育相談室に友だちを呼んで『ゲーム屋さん』が開ける。

教科学習に取り組める可能性の出現



【キーポイント】 楽しみにしている活動を生活の中に位置付け、自己決定できる状況をつくることで、目当て・見通しをもって学校生活を送ることができます。そのようなことを繰り返すことで、新たな可能性も見えてきます。

<ヒロシさんの動き>

通常の学級の教室にいられなくなる。

教育相談室（空き教室）に居場所を見つける。

教育相談室を居場所と認め、6人からなる支援チームを編成して支援に当たる。

明るい表情を取り戻してくる。

「教育相談室に友だちを呼んで『ゲーム屋さん』をやりたいんです」

予定表を忘れてきたり、そのときの気分で予定を変えたりするようになる。

「気分が乗らないので、体育は休みます」

自分で立てた予定を守って学校生活を送れるようになる⇒休み時間の『ゲーム屋さん』が定着する。

「先生、サインしてください。『ゲーム屋さん』のOKサインもお願いします」

予定表が定着するにつれ、学校生活も軌道に乗ってきた。⇒気持ちの余裕も生まれてきて、教科学習にも意識が向いてきているようだ。

「パソコンで漢字の勉強をしたら、遊んでもいいですか。『ゲーム屋さん』のポスターも作りたいです」

<職員の対応>

学級担任：学級の子どもと共に探しまわる。

養護教諭：個別にヒロシさんの話を聞く。

※教員1人が1日1時間ずつ個人に対応する個別支援体制の構築

支援チーム：見通しをもって生活できることとチームの支援が円滑にできることを願い、「予定表」を導入する。

支援チーム：願いの実現を通して目当てをもって学校生活ができることを願い、時間の終わりに担当職員のサインが記入できる「サイン帳形式の予定表」に変更する。

※サインが埋まっていれば『ゲーム屋さん』はOK

支援チーム：得意なパソコン利用を生かして教科学習にも取り組めるようになることを願い、ご褒美としてのパソコンを利用した漢字練習を取り入れる。

支援チーム：教科学習や仕事に取り組んだ時間に応じて、その直後にパソコン利用を許可する。

パソコンを利用して漢字の学習に取り組むことを繰り返し、更に、算数の計算問題や印刷物配布の手伝い、ベルマーク仕分けの手伝いなどにも毎日取り組むようになりました。

「勉強や仕事をクリアして、パソコンの時間をゲットします。」